

日蓮宗の本尊

立正大学教授

執行海秀

『みのぶ』昭和四十三年十二月号所載

「聖徳太子は篤く三宝を敬へ、三宝とは仏と法と僧となり。即ち四生の終歸、万国の極宗なり。何れの世、何れの人がこの法を貴ばざる。人はなほだ悪しき者すくなし、よく教うれば之に従ふ。それ三宝に帰せずんば何を以てか枉れるを直さん」

と仰せられている。この三宝は仏教の基準でしょう。そこで、本尊についての考え方をきめておくために私達はこの三宝について考えてみなければいけない。

三宝とは仏法僧ですが、そこから三宝本尊にしたらという議論もあります。そこでこれでは中心が明白でないというので、仏と法を中心にしてよう仏本尊・法本尊というあり方が出て来ます。これはこれらの一つの中に三宝が含まれているというのです。ところが、私達の世界は差別の世です。言葉では平等が説明出来ても、實際生活ではなかなか差別即平等とはなりません。

そこで三宝をどこに中心をおいて論ずるかという議論が出来ます。私は法は仏の法であり、僧は仏の法を弘める人だ、ということを経本におかないと矛盾を生ずることになると考えています。この立場では、行いが仏の意に叶っているかどうか大切なことになり、それが出来得た時に、一体三宝という考えは出て来ます。

聖徳太子が三宝を敬へといわれた対象は在俗の人だったでしょう。この時、僧は敬われ、帰依される対象ですから、立派な行いの人でなければなりません。そして亦、

僧自身も他の僧を敬まわなければならないでしょう。そうすると、僧は私達の師である日蓮聖人だとすることが可能になります。そこで三宝とは、釈尊（本師釈迦牟尼仏）と法華経（お題目）と日蓮聖人だと日蓮宗では規定しても良いかと思うのです。

仏法僧の三宝一体ということはむづかしいことですが、このように一つづつを別々に説明すると解りやすくなります。しかしこれで解決されるわけではありません。

ここで本迹の問題が出て来ます。インド出現の釈尊は機に応じて出られたものだから迹仏であり、その後に入間の釈尊をこの世に出現させた本体の仏様・本仏釈尊がおられるのだという。そこで日本シナの大乗仏教はインドの釈尊を下のものとして、垂迹の仏、本体の仏を一段上の本仏というように名づけて、論議する立場があります。これは法身・報身・応身の三身の問題に関係があるのですが、仏教の本源をどこに求めるかに関係あることです。インド出現の釈尊を仏教の根源としたのが小乗仏教の現実中心の考えでありますし、反対に真如と一体になった釈尊を中心に考えたのが、大乗仏教の形而上の本地垂迹の考えになります。

この本仏を極端にまで進めたのが真言宗の大日如来であり、迹仏に近づきすぎると小乗仏教になってしまう。そこで日蓮宗では本迹一致という言葉をつくった。しかしこれは言葉としては解るが、現実としては理解することが出来ない。日蓮聖人は釈尊に久遠実成を認められた

ように思われる。

日蓮宗の釈尊は久遠実成の釈尊として考えています。日蓮聖人は自らを人間日蓮といっていますが、私たちは信仰のあり方として本化上行の日蓮聖人と見ています。これは普通の私達と同格ではなく、仏様の弟子としての考えていることから来ます。

同じように、インド出現の釈尊は歴史的人物として人間釈尊だったでしょう。しかし私たちはこの釈尊を本仏釈尊として信仰しております。これは本地一体でしょう。どちらかに優劣を論じてはいけません。インド出現の釈尊を除いて本仏はありません。これをすておいて、これは迹だからとして自分が直に本仏や本化とつながろうとすると、異端が始まるでしょう。現実の釈尊・日蓮聖人を基点として、そこに信仰を見て行かないと間違った信仰に入って行ってしまうことになるでしょう。

この釈尊と久遠本仏との関係のように、法華経とお題目とがある。日蓮宗ではお題目のことを本法というが、法華経のことは本法とはいわない。法華経は釈尊が八年前かかって説かれた膨大なものを羅什三蔵が二十八品にまとめて翻訳されたもので、釈尊の精随であると日蓮聖人はいつておられますが、法華経を本法とはいわれない。その故はお題目は絶対の真理を表現したものであり、法華経はさとりであるお題目を釈尊が説明されたものだからです。悟りと悟りの説明とのどちらかがすぐれているということは出来ないでしょう。悟りがあつたから悟り

の説明があるのです。悟りの説明は悟りを表現したものですから、釈尊と本仏とが不離のように、題目と法華經とを切り離すことは不可能です。法華經を離れて本法の題目は存在しないでしょう。創価学会の、法華經はインド人のために説かれたものであるから、我々は題目だけでいいのだと二つを別に見るあり方は日蓮聖人のものではないだろうと思います。ですから、日蓮聖人は法華經の肝心・南無妙法蓮華經といっております。法華經は全体であつて、お題目は肝心なのです。全体がなくて肝心があり、肝心がなくて全体がある筈はありません。この二つは全く離すことの出来ないものなのです。

このように、インド出現に即した本仏釈尊、人間日蓮に即した本化上行、法華經に即したお題目というように現実をふまえる規準を忘れてしまつてはいけませんので、これを忘れると本地という言葉にまどわされて、飛躍してしまつと誤りになってしまうのです。

この点は法華經の特色でしょう。何故か小乗は釈尊を人間と見、大乘はインドの釈尊の外に真理そのものを人格化したものを仏として、釈尊はその仏の世界を説いた人だと一段下に見ているのです。これでは大乘は小乗の否定の上に成り立つだけで、仏の意に叶わないとして、法華經は大乘が否定した小乗を包みこみ生かして行こうとしました。これが妙法なのです。すべてのものを生かして行くことです。

本仏・本法・本僧とは私の理解では、久遠実成の釈尊、

釈尊を久遠の本仏と仰ぎ、日蓮聖人を本僧その本仏の御弟子上行菩薩と仰ぎ、法華經を絶対の真理と仰ぐ信仰である、こういうふうに考えます。

それではこの中のどれが先であるかというに、この点で法について考えてみなければいけません。法には種々ありましよう。私達の生命から何からこの世の全てを握っている自然法があります。これは私達にとつて不可思議な世界です。文明の進んだという現代ですら自然が創つたものにはとてもかかないません。心臓手術といつても人の心臓を移植するだけで創り出すことは出来ません。

そこでキリスト教は自然も人間も神が創つたものだと考えました。しかし、仏教はちがいます。仏教は人間の頭で創つた世界です。人造です、自然法ではない、私はそう理解しています。

仏教は釈尊のさとりに基づく法です。釈尊は自然法を悟られたのではないのです。世は無常ということを経られたともいわれますが、それ丈ではないのです。因縁所生の法だけでもなく、釈尊が妙法というのは自然や不思議の法ではないと考えます。

そこで自然法を棚上げして、人間の文化としての法を考えてみましょう。宗教は文化です、文化は人間が関与し創作したものです。人間の文化は見方にすれば自然よりも劣るが、見方によれば勝れております。自然を改造し神を創造して行く、人間を改革し自然の中に価値を見出して行くこれが文化です。この世の真善美というもの

は自然にはなく、人間の価値判断によるもので人間が創ったものです。天地自然の姿を見て種々なことを感ずるのは、人間が創り出した価値によるのです。そこに文化が発達したのです。文化はこのように人間の自由な心によって生み出されて来たのです。

こうして、人間の文化が道徳や芸術や宗教を創り出しましたが、宗教の根幹は信仰です。信がなければ宗教はないでしょう。宗教は理屈ではありません。信仰しているという人の中に、私は私の家に仏様をお祀りしているから別にお参りにいく必要はないという人がいます。こういう人は事を飛びこえて、真理と一つだという錯覚をしているのです。法華経はこういう観念的なことを教えていないでしょう。私達は、具体的な事実の世界をふまえていないと、観念化してカラ廻りしてしまうでしょう。自分を絶対なのだとか慢の心を否定し、一心欲見仏をすすめる教えが法華経に多く見られるのは、このことをいましめるためなのです。そこでお題目を唱える時、そこに釈尊がおいでになるのだ、釈尊の口に替って私達が唱え、それを自分で聴聞しているのだと考えなければいけないことです。見仏・聞法とはこういうことで、そこに信仰があります。

このあり方が仏と法に帰依することです。そこで釈尊あつての法です。法あつての釈尊ではありません。自然科学は法あつての釈尊ですが宗教は発見ではありません。釈尊は仏教を発見したのではなく、人間としての本源的

なあるべき姿、行き方を宗教として示されたのです。それを法として表現した時に妙法蓮華経となつたのです。ですからお題目を唱える心には、釈尊の御精神を忘れてはいけません。

このような点で、日蓮宗の本尊は本師釈迦牟尼仏でなければならぬ、妙法蓮華経はその本師釈尊の精神を頂戴する、仏さまの心に叶いますと誓約をすることです。日蓮聖人は在世の人々は南無釈迦牟尼仏・南無妙法蓮華経と畢ぬとある。私達は本師釈尊に向つてお題目を唱えるべきでしょう。私達は釈尊の教えによつてまちがった心を直して行くのです。その前にひれ伏して誤りを正し帰依して行く。そこが信仰なのです。お題目は仏様の法を素直に聞く法であり、お釈迦さまの法に帰依しますと誓約する法であり、何とかして下さいと拝む法ではありません。肝心のお釈迦様を忘れ去ることは絶対にいけません。

お題目や大曼荼羅を本尊とすることもよろしいでしょう。しかし、この場合には本師釈迦牟尼仏が明白に打ち出されておられないので、この点を充分に御注意を下さいますよう。

(文責編集部)